

ひばりクリニック・うりずん実習レポート

自治医科大学医学部5年 倉田紗理

まず、ひばりクリニックでの外来見学では一番に、ご利用者さんに対する態度を学びました。ご利用者さんの話をじっくり聞き、どんなお話しも笑顔で遮らずに最後まで聞くという姿勢は忙しい業務の中で意識してもなかなか難しいことだと思います。それをスタッフのみなさんが共通認識として持ち、ご利用者さんが納得した様子で帰っていかれるのを見て、なんでも相談できるクリニックという名の通りだと感じました。

今回の実習は大学病院での小児科実習で介護が必要なお子さんの診察を見学して普段の生活や介護はどのようにされているのだろうと興味を持ち、また、大学同期の古橋さんから紹介してもらい希望させていただきました。介護が必要なお子さんのために家族はそのお子さん中心の生活となり、いままでの生活が送れなくなるだろうと予想できましたが、実際の生活の様子を少しでも知りたいと思い、小児の在宅医療やレスパイトケアを見学したいと思いました。

まず、印象的だったのはうりずんに、ご利用者さんを送ってくる際の保護者の皆さんの顔が明るく、ご利用者さんが小さい子供の場合、ぐずったりすることもあったのですが、じゃあね！とスタッフさんに任せてさっと車を発進させることでした。いままでお預かり施設の見学の経験がなかった私は、介護が必要なお子さんに保護者の方はべったりくっついていてというイメージがありました。保護者の方々が大事なお子さんをこのように心配なく預けられるのは、スタッフの皆さんとの信頼関係があるからだと感じました。うりずんの見学をさせていただき、スタッフの皆さんがご利用者さんのことを理解し、関係性を強くもっているのがわかりました。スタッフ間でご利用者さんの情報を共有し、どうすればさらによいケアができるのかミーティングでは皆さんが率直な意見や考えを言いあい、皆さんの表情は真剣そのものでした。

小児の在宅医療を見学させていただいたのも初めてだったのですが、どうしても一日中家の中でお子さんにつきっきりになってしまう保護者の方への配慮や体調を気遣ったりする先生の姿勢で、お互いが明るい雰囲気を作り出しているように感じました。また、3人兄弟のうち2人に障がいのあるお宅にお邪魔させていただいたのですが、お母さんはどうしても介護が必要な2人に手をかけてしまって、健常者であるお子さんがどうしてもひとりになってしまうのではないだろうかと考えていました。しかし、そのお子さんを塾へ送る時間になると、お母さんは先生の診察中にもかかわらず、何気なく「先生、ちょっとこの子塾に送ってきます！」と、出かけて行きました。これもまた、私にとってはとても新鮮な光景でした。お母さんにとって、3人とも同じくらい大切な子供であることを実感し、みんなに愛情を注ぐのがお母さんなのだと感じました。また、そのようなことを可能にするのは先生との関係性があるからなのだろうとも思いました。

この実習全体を通して、在宅医療やレスパイトケアによって家族の負担が軽減し、家族全員が幸せに暮らしていけることへのお手伝いできて、とても素敵なケアだと感じました。今はまだ、制度が整っておらず、困っている方々がたくさんいらっしゃると思いますが、このような現状と小児の在宅医療やレスパイトケアがもっと普及するために自分ももっと勉強して、考えを深めていきたいと思いました。

今回の実習で先生方、スタッフの皆様、ご利用者様に変にお世話になり、貴重な経験をさせていただき勉強できたことに誠に感謝しております。ありがとうございました。